

台湾総統選の核心にあるものは

台湾の総統選挙まで1カ月を切った。来年1月14日の投票に向けて、現地の世論もメディアもいよいよ白熱している中で、先週、訪台する機会を得た。大腸がんの手術で入院された李登輝・元台湾総統をお見舞いするためである。

李登輝氏天下国家大いに論ず

わが国の国民、特に産経新聞読者には、李登輝さんの病状をお気遣いの方も多いと思われるので、ここで報告させていただくと、11月1日に行われた手術は6時間半にも及んだものの大成功で、李登輝さんは半月後には退院され、化学療法や放射線治療もせずに現在、静養に専念しておられる。

間もなく満89歳と、ご高齢なので大事にしていたかなければならないが、李登輝さんは、いかにもクリスチャンらしく、「神が私にもう少し働くように救ってくれた」とおっしゃっていた。私を相手に、台湾の馬英九政権の中国傾斜への危惧や、日本の野田佳彦政権の経済政策への懸念など、話が天下国家のことに及ぶと、相変わらずの意気軒高であられた。

そんな李登輝さんにとっての痛恨事は、11月17日の黄昭堂・元台湾独立建国連盟主席の不慮の死であった。李登輝氏が黄氏を悼んで贈られた献花には「痛失良友」とあったが、政治的立場のいかんにかかわらず、黄氏の人柄と包容力は誰もが認めるところである。

ちなみに、中国当局から台湾独立派としてしばしば批判される李登輝さんの一貫した立場は、台湾はずでに主権独立国家だということであり、黄昭堂氏らの考え方とは違ふ。だが、氏の運動には理解を示され、台湾がまだ「動員戡乱時期」つまり戒厳令下において、台湾独立運動に加わった学徒が帰台できなかったころ、李登輝さんは私に会った際に、黄氏や許世楷氏(前台北駐日経済文化代表処代表)の消息を尋ねられた。私は黄氏とは東大大学院時代からの学友で、私たちの「アジア・オープン・フォーラム」が2007年に李

正論



国際教養大学理事長・学長

中嶋 嶺雄

中国はよもや今回は、この台湾海峡危機の時のような出方はしないであろう。しかし、台湾との関係いかに最大の対外戦略に据えて軍事力、特に海軍力を増強している中国だけに予断は許さない。

その中国が、対台湾政策の根拠にしているのが、いわゆる「九二年合意」である。馬総統はこの10月、新たに中国との「平和協定」締結の構想を提起するなど中台関係の安定を図ろうとしている。

「九二年合意」めぐる相違

「九二年合意」とは、李登輝総統時代に設立された台湾側・海峡交流基金会の辜振甫代表と、中国側・海峡兩岸関係協会の汪道涵代表が、92年10月に香港で会談したときに生まれたといわれるものである。「一つの中国」では双方が一致しつつ、その解釈については、中国側があくまでも「一つの中国」だとし、台湾側は双方で異なるとする、いわば同床異夢を容認した内容だとされている。

「九二年合意」は、民進黨の陳水扁政権登場直前の2000年4月、当時の台湾・行政院大陸委員

会の蘇起・主任委員(現海峡交流基金会理事)がその存在を公表している。しかし、当事者である故辜振甫氏も李登輝氏もそんな合意があったとは認めてはいない。

辜振甫氏は、台湾の経団連にも相当する工商協進会の理事長という財界の指導者として、「アジア・オープン・フォーラム」にも一貫してかわられ、中国との関係についても、私はその都度、氏から詳しくお話をうかがってきた。

92年当時の李登輝総統は、中国との関係では前年に制定した「国家統一綱領」の実現を課題に据えていて、中国から台湾に来た人々の親族との関係や財産、墓地などの問題を処理する92年7月の「人民關係条例」の制定に力を注ぎ、あの頃、「九二年合意」なるものに言及されたことはなかった。

台湾の将来がわが国にとっても、アジアにとっても極めて重要であることは言うまでもない。台湾住民が、当面の経済的な利益のみならず、中台関係など外交・安全保障問題にも着目して、賢明な選択をすることを期待したい。(なかしま みねお)